

日本ラカン協会秋のワークショップ「エディプスと女性的なるもの」

日時：2017年10月15日 14時～17時

場所：専修大学神田校舎7号館774教室

提題者：

花田里欧子（東京女子大学）

春木奈美子（京都大学）

司会：立木康介（京都大学）

フロイトが女兒のエディプスコンプレクスの独自性（男女のエディプスコンプレクスの非対称）に気づくのは遅かった。1925年のことだ。

男性と違って自分にはペニスがないと確認した女兒は、自分がひどく「損なわれている」と感じ、男性と同じようにペニスをもつことを熱望するようになる（ペニス羨望）。同時に、自らと同じ不幸を被っている母親に幻滅し、母親から愛情を引き上げると、それをまるごと父親のほうに振り向ける。父親なら自分にペニスをくれるかもしれない、いや、ペニスの代わりである子供をくれるかもしれない、と。そしてこのように父親に転移された欲望こそが、やがてペニスをもった男性（父以外の）への愛に、すなわちいわゆる「正常な」異性愛に、女性を導くだろう……。こうしてフロイトがたどり着いたのは、エディプスコンプレクスと去勢コンプレクスの順序は男児と女兒でまったく逆になるという認識だった。ここでは、男性性と女性性、男性の欲望と女性の欲望を、ペニスがあるか／ないかの区別に由来する同一の論理で、つまり唯一の尺度で捉えようとする、身も蓋もないファリシズムが幅を利かせている。

もっとも、このように去勢の一元論に支えられてのこととはいえ、フロイトがかろうじて男性性と女性性の非対称を際立たせるに至ったことは評価されてよい。そこにフロイトを導いた要因のひとつは、母娘の前エディプスの癒着（ペニスの不在がまだ女兒にとって問題にならない段階での母子密着）の重要性に遅ればせながら気づいたことだった。この発見は、「死の欲動」の導入に続くフロイト理論の地殻変動の陰に隠れてしまいがちだが、その晩年を代表する理論的成果のひとつであると言わねばならない。にもかかわらず、この前エディプスの密着がもつ臨床的射程を、それを特徴づける激烈なアンビヴァレンツが女性のその後の性生活にいかに重くのしかかるのかという実際的問題にほとんど

収斂させてしまい、去勢コンプレクス以後に確立されるエディプス的な女性性のいわば余白で、この母娘関係の名残がいかなる運命を辿りうるのかについて、フロイトがそれ以上掘り下げて追究しなかったのはいささか残念だ。実際、最晩年の名高い論文「終わりある分析と終わりなき分析」においても、フロイトは去勢コンプレクスの二つの顕れかた、すなわち、男性における「去勢不安」と女性における「ペニス羨望」を、精神分析のプロセスのなかで分析家を「尋常でないほどひどく煩わせる」困難と位置づけながら、それを結局のところ分析では克服できない、それどころか克服する必要のない問題とみなすことで満足しているように見える。フロイトによれば、去勢不安は女性的な立場に置かれることへの強い拒否の形をとり、分析家の解釈やアドバイスをいっさい受けつけないというタイプの抵抗を引き起すのにたいし、「ペニス羨望」のほうは——ペニスの代理である子供がほしい、ペニスをもった男性パートナーがほしいという願望の形をとって、根強く存続してきただけに——分析治療がこれを満たしてくれないことがわかると、重篤な抑うつを生じさせるおそれがあるという。にもかかわらず、フロイトはそれらを、分析の作業がそこに到達すれば分析が完了したと考えてもよい「岩盤」に帰することをためらわない。その岩盤とは、精神的なものがその上に基礎づけられるところの「生物学的なもの」であり、それに太刀打ちすることは精神分析家の能力に余るといっているのである。

このように生物学的なものへの信頼が顔をのぞかせるフロイトにたいして、ラカンの立場ははるかにラディカルだ。二つの大戦を経験したあとのヨーロッパにあって、ラカンにはもはやフロイトと同じ科学的理想を共有する必要がなかったのに加え、フロイトの時代にはまだ存在しなかった、あるいは萌芽的にしか見いだされなかったいわゆる「人間科学」（ただし、ラカン自身はけっしてこの呼び名を好まず、自らを「主体の科学」の担い手とみなしていた）の成果を参照できる強みがあった。そこから、まさに男と女の差異についての、ラカンの次のような発言が生まれる——「私たちは今日、性の分化という問いにかんして、諸機能の配分がいかにして、社会のなかで、[そのつど二つの項の] 交代ゲームのかたちで根拠づけられてきたのかを知っている。それは、現代の構造主義が最もうまく説明できたことがらだ。構造主義は次のことを明らかにしたのである。すなわち、根本的な諸交換が実行されるのは姻戚関係の水準において——それゆえシニフィアンの水準において——であり、その場合の姻戚関係とは自然による生成に、生物学上の系譜に、対立するものである、というこ

とだ。そして、まさにそこにおいてこそ、私たちは社会の動きの最も基本的な諸構造を見いだす。これらの構造は、ひとつの組み合わせを構成する諸項のうち書き込まれなくてはならない」(*Séminaire XI*, p. 138)。

ラカンが念頭においているのは明らかにレヴィ＝シュトロースの『親族の基本構造』だが、それを繙くまでもなく、この一節に込められた意図は見紛う余地がない。性の分化に伴う諸機能や諸特徴を人間社会において支えているのは、生物学的事実ではなく、二項対立的構造をもつ「シニフィアン」の組み合わせである、とラカンは言いたいのだ。いいかえれば、ある個体が男もしくは女としていかに振る舞うか、いかなる配偶者を娶るか、それどころか、いかなる性格を身につけるかに至るまで、他の動物においてならいざ知らず、少なくとも人間においては、生殖という目的に奉仕するあれこれの生物学的、生理学的、解剖学的機能によってではなく、私たちの言語と文化を構成する要素にほかならないシニフィアンによって決定される、ということだ。ようするに、ラカンにしたがえば、話す存在たる人間の性と生物学的性のあいだには埋めがたい断絶が存在しているのである。実際、いったんシニフィアンの構造に接続されるや、私たちの身体は本来の生物学的事実とは根本的に切り離された別の現実——それをラカンは「象徴界」と呼ぶ——を生きざるをえない。とすれば、私たちの「性」もその例に漏れるはずがない。両性の結合による「生殖」が、人間において、両性の関係をいささかも目的論的に規定しないことは、いまさら言うに及ばない。だからこそ、私たちは性的にさまようことを余儀なくされるのである。生物学的な目的性を奪われた性関係、それどころか、そのような目的からいくらかでも隔たりうる圧倒的な可変性、可塑性を与えられた男と女の関係は、何をめざし、どこに向かうのだろうか。もちろん、ここにはいかなる正解もない。人間が話す存在であり(り続け)るかぎり、男も女もこの正解の不在だけが君臨する虚空を漂う運命を免れえない。そのことをラカンは、1970年代に一世を風靡するあの名高い、しかしどこか謎めいた余韻を残すテーゼに凝縮して言い表したのだった——「性関係はない」と。

このテーゼは、しかし、性関係の不在を「補填」する享樂が存在することを妨げはしない。ラカンはそこに二種類の享樂を区別する。ひとつは「ファルス享樂」、すなわち男たちの、いや、それどころか、「去勢」のみに依拠しつつ自らの性的ポジションを決定するすべての主体たちが甘んじる享樂。それにたいして、もう一方の享樂は、「去勢」を唯一の根拠としないことに同意する主体た

ち、それゆえファルス的なものが形づくる集団や享樂を「すべて」とみなすことから自由である主体たちに、つまりとりわけ女たちに開かれた享樂であり、カトリックの神秘体験者たちのそれにも準えられるこの享樂をラカンは「上乘せ享樂 *jouissance supplémentaire*」と呼ぶ。こうして、男女の差異はラカンにおいて、フロイト的な去勢の一元論から解放されると同時に、フロイトのもとでそれが論じられていた欲望の水準とは異なり、享樂の水準で捉え直されることになる。しかし、このようにもたらされた光明は、同時に、いっそう深い陰翳を伴わずにはおかない。ラカンが去勢の彼岸に見出す女の享樂、女性たちが感じてはいても、それが何であるかを名指すことはできない「上乘せ享樂」とは、いったいいかなる享樂であり、精神分析的知がそれを捉えることはいかなる論理によって可能になるのだろうか？

いや、私たちは、一足飛びにそこまで進まなくてもよい。いったんエディプスと欲望の水準に立ち戻り、ラカンによる新たな問いの措定に向けて、いかなる概念の配置がエディプスの彼岸に「女性的なもの」を浮かび上がらせるのかを検討してみよう。二人の臨床家とともに。

(参考：立木康介「ラカンと女たち」I～VI、『三田文学』No. 126～No. 131)

春木奈美子「分析的観点から浮かび上がる女性的なものについて」

フロイトは女性について語るにあたり、ある種の失錯行為をおかしている。ときに引用元を誤ったり、ときに引用であること自体を忘却したりすることもあった。そうした女性性に関する「忘れられた」テキストを拾い集めたのが、Marie-Christine Hamon による *Féminité Mascarade* である。そのうち、今回の発表では、ラカンも随所に言及している Joan Rivière の「仮装としての女性性」を取り上げつつ、母・娘・女をめぐる検討していきたい。

花田里欧子「家族臨床における「母」と「女」」

女性患者の心理臨床において、しばしば「母」と「女」が入り組みつつ立ち現れる。たとえば、なんらかの課題を抱えているとされる子ども（家族療法では Identified Patient と呼称する）自身の来談がかなわない場合、その保護者等との面談の形式をとる。このときしばしば母親に生じることとして、「母」として子どものことを相談しに訪れているにもかかわらず、いざ話を始めると、子

どもの話はいっさいせずむしろ「女」としてその場にのぞまれることがある。
本発表では症例を通して、家族の観点を含めつつ、そのことの意味を問いたい。

問い合わせ：日本ラカン協会事務局
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25
青山学院大学総合文化政策学部
3号館 3204 福田大輔研究室
E-mail : sljsecretariat@netscape.net